

### [成果情報名] 基肥施肥量および台木の違いがモモ若木の枯死症に及ぼす影響

[要約]モモ若木の枯死症は、基肥施肥量が多い場合に発生が多い。「おはつもも」台では基肥の慣行施用量を守る、または「ひだ国府紅しだれ」台を用いることにより枯死症の発生を軽減できる。

[キーワード]モモ、若木、枯死症、基肥施肥量、ひだ国府紅しだれ

[担当]福岡県農林業総合試験場・豊前分場・果樹チーム

[代表連絡先]0930-23-0163

[分類]研究成果情報

### [背景・ねらい]

近年、県内のモモ産地では主に3～5年生の若木の主幹部に胴枯様の障害を伴い、主枝や垂主枝の一部が枯死する枯死症が問題となっている。この枯死症はほ場によっては2～3割程度発生し、農家所得に影響を与えている。クリでは秋季の施肥量が多いと枯死症が発生しやすいことが報告されている。しかし、モモの枯死症については施肥量や台木の違いによる影響は明らかでない。

そこで、モモ若木の枯死症に及ぼす基肥の施肥量と台木の違いによる影響を明らかにする。

### [成果の内容・特徴]

1. 「おはつもも」台では基肥を慣行施肥量の2倍量とすると、枯死症の発生割合が多くなり、障害程度も重く（枯死部分の割合が大きくなる）（図1）。
2. 「おはつもも」台では基肥を慣行の3倍量施用すると、慣行に比べ主幹等に発生する胴枯様障害の発生箇所が増加する（表1）。
3. 「ひだ国府紅しだれ」台を用いると、「おはつもも」台に比べ、基肥を慣行施肥量の2倍量としても枯死症の発生割合が少なく、障害程度も軽く（枯死部分の割合が小さくなる）（図1）。

### [成果の活用面・留意点]

1. 若木の基肥の施用量は窒素（N）、リン酸（ $P_2O_5$ ）、カリ（ $K_2O$ ）とも成分量で10kg/10a程度（0.5kg/樹）とする。
2. 「ひだ国府紅しだれ」台は「おはつもも」台と比較して、穂木品種の初期樹冠拡大が遅れることがある。

[具体的データ]

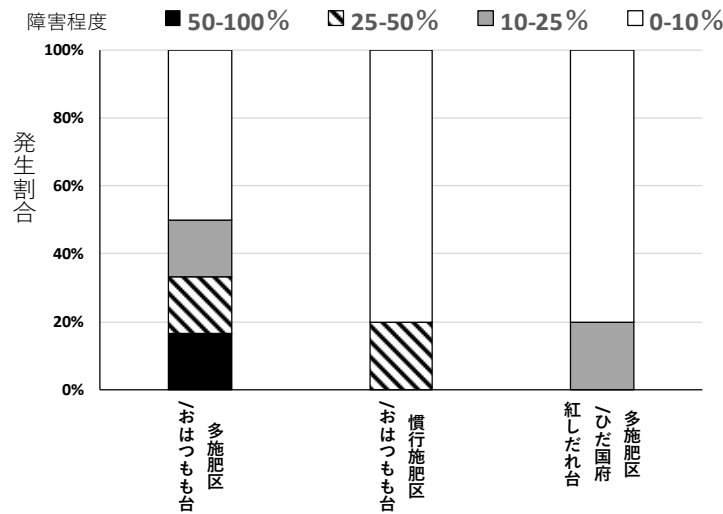


図1 基肥施肥量と台木品種が3年生モモの枯死症発生に及ぼす影響 (2019年～2020年)

- 注) 1. 枯死障害程度は株全体のうち枯れた部分の割合を示す  
 2. 枯死障害程度0-10%は栽培的に問題がない程度を示す  
 3. 基肥は10月23日に施用  
 4. 慣行の施肥量はN:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=10.5:12.0:10.5kg/10a  
 5. 多施肥区は慣行施肥量の2倍量を施用  
 6. 各区6～10樹(日川白鳳3年生)を供試

表1 基肥施肥量が3年生モモの枯死障害発生に及ぼす影響 (2020年～2021年)

基肥処理	樹高 (cm)	胴枯様障害数		枯死芽率 (%)
		全体 (箇所)	重度 (箇所)	
無施肥	156.0 a	0.6 a	0.0 a	23.4
慣行	178.0 b	0.4 a	0.2 ab	21.9
2倍量	167.6 ab	0.6 a	0.6 ab	28.4
3倍量	170.0 ab	2.2 b	1.0 b	27.6

- 注) 1. Tukey-Kramer検定により同項目の異文字間は5%水準で有意差あり。  
 2. 胴枯様障害数(全体)は胴枯様障害が発生した全箇所の数を示す。  
 3. 胴枯様障害数(重度)は樹液が発生した箇所の数を示す。  
 4. 枯死芽率=(枯死した先端芽数/全ての先端芽数)×100(%)  
 5. 各区5樹(日川白鳳3年生/おはつもも台)を供試。

[その他]

予算区分：県単

研究期間：2019～2020年度

研究担当者：池上秀利、野方仁、姫野修一 (福岡農総試・豊前)

発表論文等：